

VII 学生満足度調査

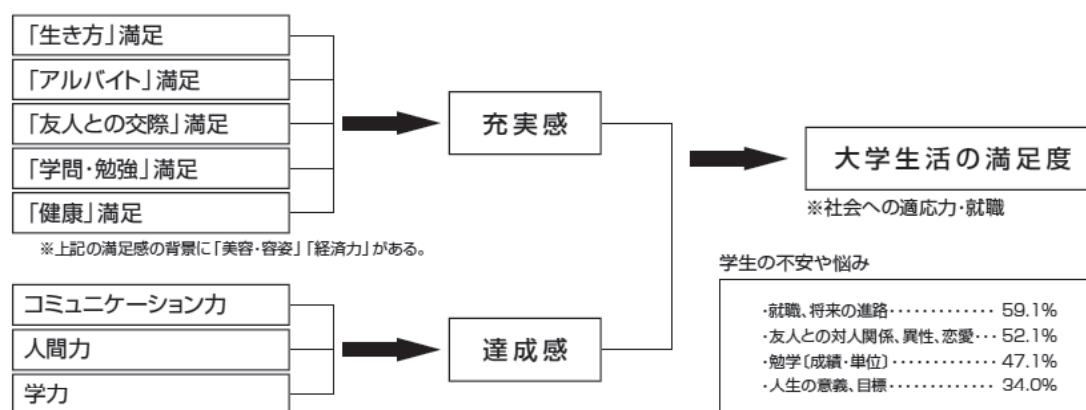
本学は、平成 17 年度から、学生満足度調査を実施している。今年度は第 3 回の調査を実施した。ここでは、前年度結果と比較しつつ、概要を整理する。なお、詳細は、『第 3 回長岡大生の生活と大学に関する調査報告書』を参照されたい。

1 学生満足度調査の位置づけ

本学の教育プログラムは、平成 17 年度から、学生に対して、「毎日の大学生活に充実感を、レベルアップを確認して達成感を、4 年間を振り返って満足感を」実感させることを基本目標にして展開されている。現代 GP に選定された本取組においては、学生へのアンケート「長岡大生の生活と大学についてのアンケート」＝学生満足度調査を通して、その「充実感、達成感、満足感」の検証を進めてきた。

平成 17 年度の満足度調査を踏まえて、図表 7-1 に示す満足度指標の整理を行った。同アンケートによれば、学生の不安や悩みの第 1 は「就職・将来の進路」であり、「対人関係」、「勉強」、「人生の目標」などがこれに続く。これを念頭に置きつつ、充実感は主として学生生活の満足度、達成感は学力等の能力向上、満足度は両者の総合（究極は望んだ進路選択の確定）として、指標構成を整理した。

図表 7-1 大学生生活満足度の構成要素



2 第 3 回学生満足度調査の概要

平成 19 年度に、「第 3 回長岡大生の生活と大学についてのアンケート」＝学生満足度調査を実施した。（巻末参考資料 3 参照）アンケート調査の概要は次の通りである。

- ・アンケート名－「第 3 回長岡大生の生活と大学についてのアンケート」
- ・調査対象－本学在籍全学生（平成 19 年 12 月現在）
- ・調査期間－平成 19 年 12 月～平成 20 年 1 月
- ・調査方法－ゼミ、演習時に自記式で実施
- ・回収率－回収数 290、回収率 74.7%

3 満足感・充実感・達成感の現状

第 3 回学生満足度調査結果をまず、満足感、充実感、達成感について、整理する。

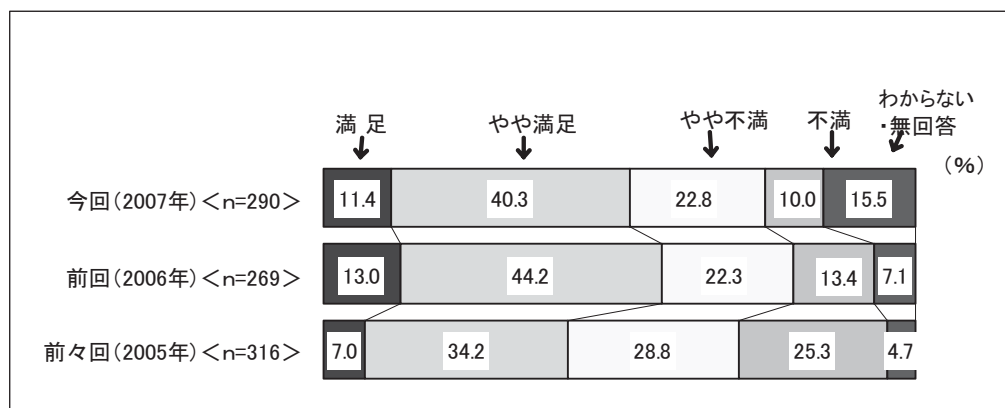
(1) 満足感

まず、大学生生活の満足感について見てみよう。

図表 7-2 は、回答総合計ベース（日本人学生と留学生の合計）で、今回（第 3 回）まで

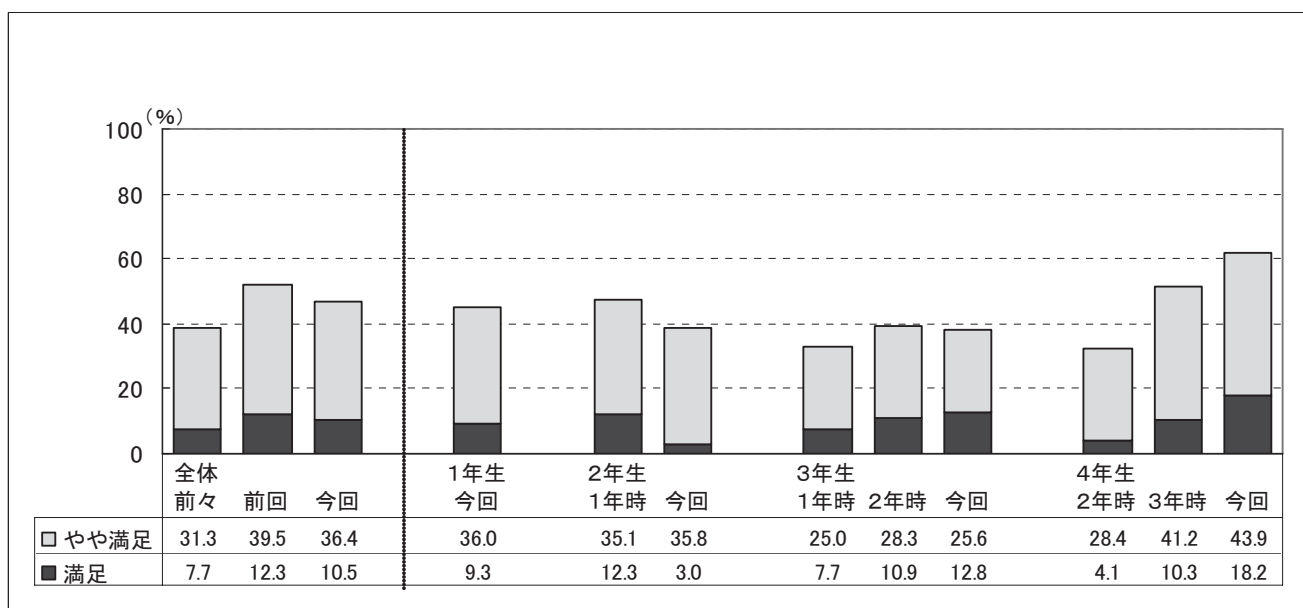
3回分の結果を図示したものである。これによれば、今回は、「満足」、「やや満足」の割合（それぞれ11.4%、40.3%）が前回よりやや低下したが、両者を合計した満足の割合は51.7%と半数を越え、不満の合計32.8%（「やや不満」22.8%、「不満」10.0%）を大きく上回った。今回も前回とほぼ同様、学生の大学生生活の満足感は不満感を大きく上回った。しかし、「わからない・無回答」が15.5%と前回の2倍にのぼり、要注意といえよう。

図表7-2 現在の大学生生活の満足感（前回比較）



これを日本人学生の学年別にみるとどうか。図表7-3は学年別に前回と今回結果を比較したものである。この図表からは、4年生は学年進行にともない満足感はかなり高まっているが、3年生は漸増で、2年生は1年次より低下という結果になっている。

図表7-3 現在の大学生生活の満足感（日本人学生の全体及び学年別時系列比較）

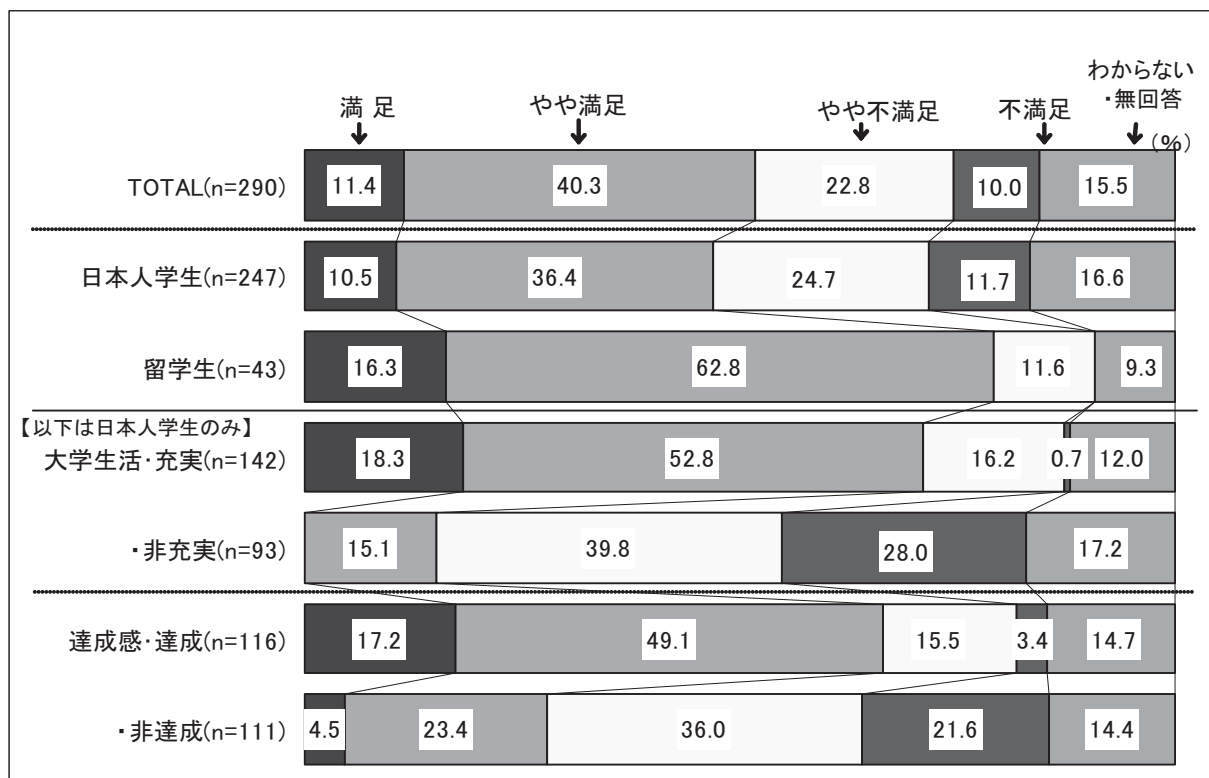


次に、属性別にみるとどうか。図表7-4によれば、次の傾向を読み取れる。

- ・日本人学生より、留学生のほうが満足感のはるかに高い
- ・大学生生活で充実感のある日本人学生は、圧倒的に満足感が高い（71.1%）
- ・大学生生活で達成感のある日本人学生は、圧倒的に満足感が高い（66.3%）

この傾向は、充実感、達成感が高い学生は、満足感も圧倒的に高いことを示唆している。充実感、達成感と満足感は密接な関係がある。

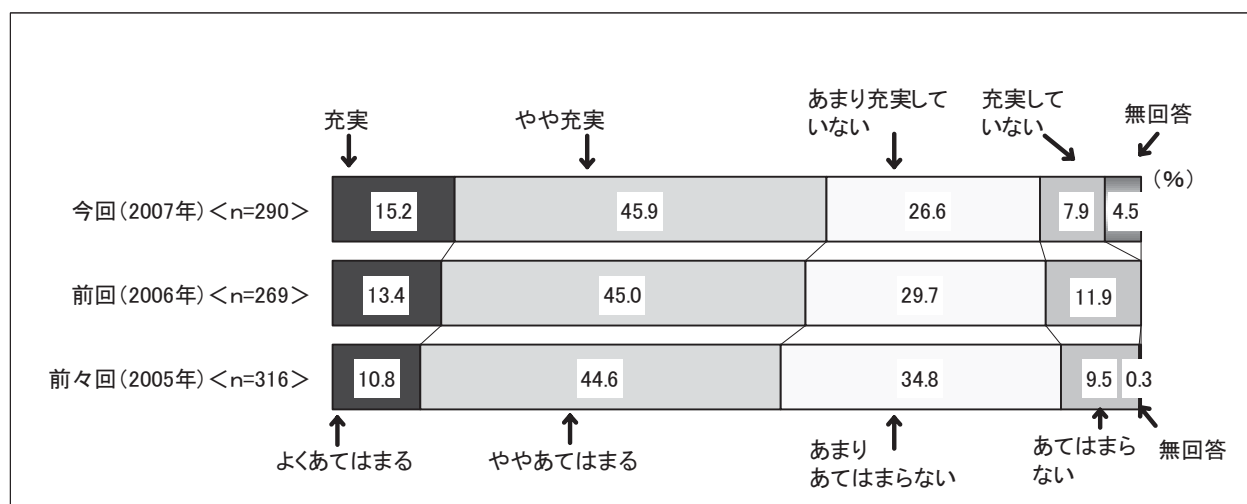
図表 7-4 現在の大学生生活の満足感 (今回・属性別)



(2) 充実感

図表 7-5 によれば、今回の「充実」と「やや充実」の割合（それぞれ 15.2%、45.9%）を合計した充実の割合は 61.1%、非充実の合計は 34.5%（「あまり充実していない」26.6%、「充実していない」7.9%）で、充実が非充実を大きく上回った。前回にくらべ、充実は 2.7 ポイント上回り、非充実は 7.1 ポイント下回った。充実感は上昇し、非充実感は下降するという良好な傾向を示している。学生の大学生生活の充実感は少しずつ向上していると言えそうだ。

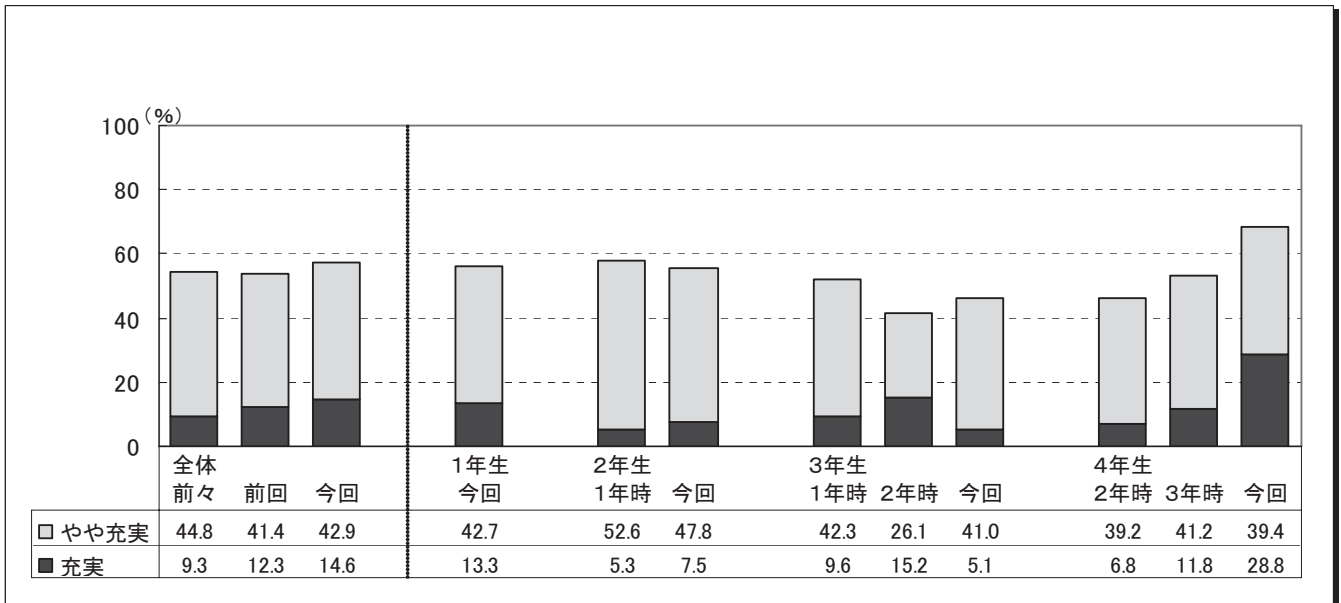
図表 7-5 大学生生活の充実感



これを日本人学生の学年別にみるとどうか。図表 7-6 は、学年別に前回と今回結果を比較したものである。ここから、4年生の充実感は満足感と同様、学年進行に応じて大きく上

昇している。しかし、2年生、3年生については明確な傾向は読み取れない。2年生で充実合計が低下していること、また3年生が2年生時より「充実」の割合がかなり低下していることは気にかかる。

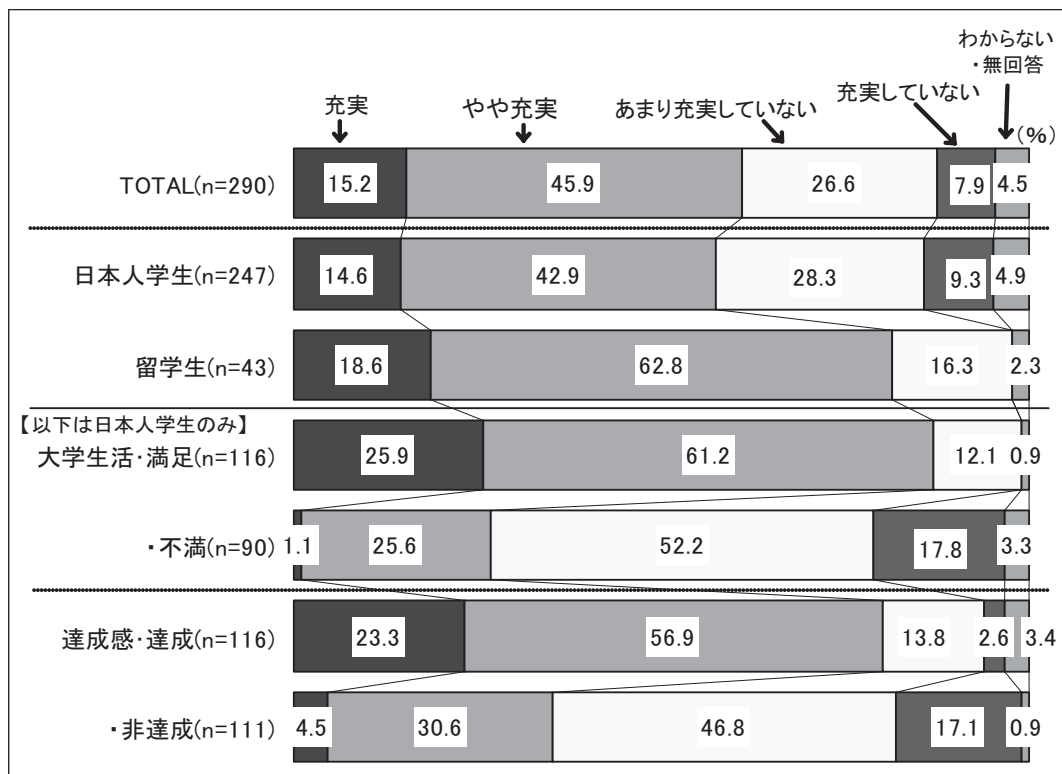
図表 7-6 大学生生活の充実感（日本人学生の全体及び学年別時系列比較）



では、属性別にみるとどうか。図表 7-7 によれば、次の傾向を読み取れる。

- ・日本人学生より、留学生のほうが充実感のはるかに高い
- ・大学生生活で満足感のある日本人学生は、圧倒的に充実感も高い（87.1%）
- ・大学生生活で達成感のある日本人学生は、圧倒的に充実感が高い（80.2%）

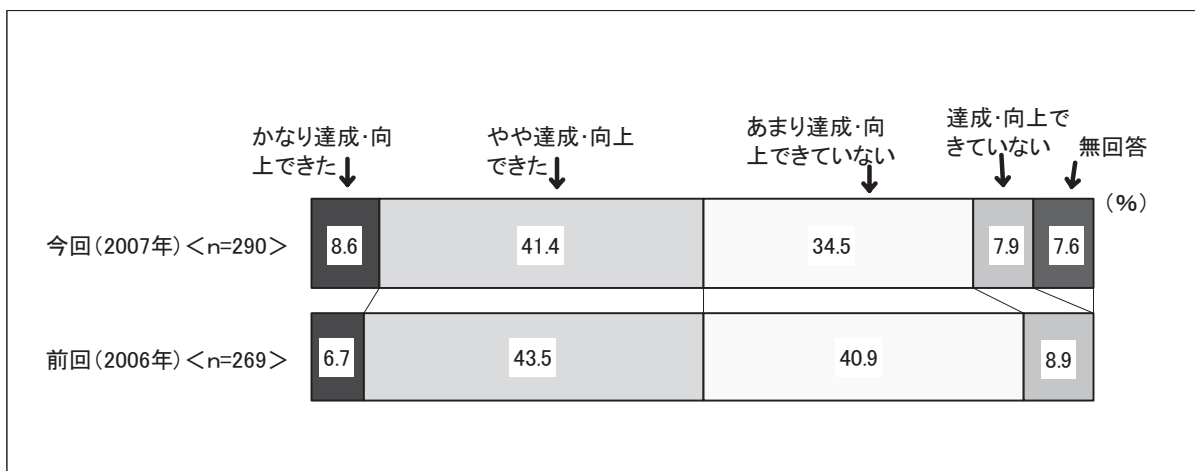
図表 7-7 大学生生活の充実感（今回・属性別）



(3) 達成感

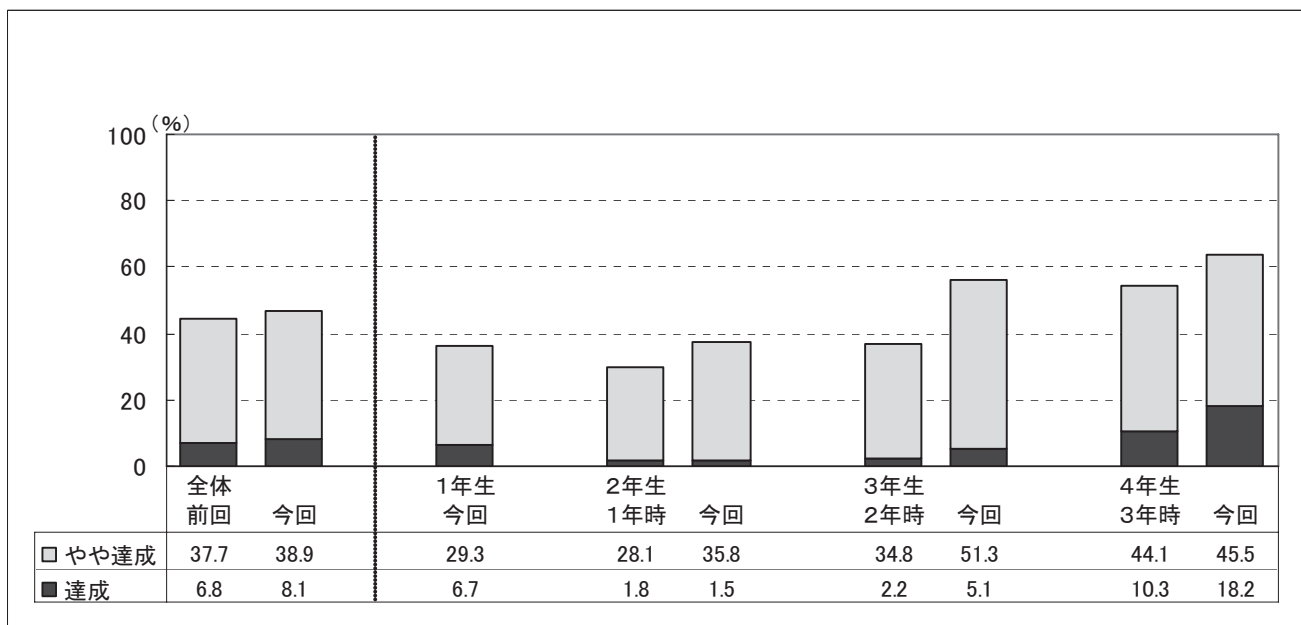
図表7-8によれば、今回の「かなり達成・向上できたと感じている」と「やや達成・向上できたと感じている」の割合（それぞれ8.6%、41.4%）を合計した達成・向上の割合はちょうど半数の50.0%で、非達成の合計42.4%（「あまり達成・向上できなかったと感じていない」34.5%、「達成・向上できなかったと感じていない」7.9%）を上回った。前回と比べると、達成はほぼ同じ（50.2%から50.0%）で、非達成は大きく減少した。しかし、無回答が増えており、あまり好ましい傾向とは言えない。充実感と異なり、達成感は上昇しているとは言えない。

図表7-8 大学生生活の達成感



これを日本人学生の学年別にみると、図表7-9によれば、1～2年次の達成感は一貫して低く、3年次にやや上昇し、4年次になって達成感が高まるという傾向を示している。2年生の達成感がとくに低いことは大いに注視しなければならない。

図表7-9 大学生生活の達成感（日本人学生の全体及び学年別時系列比較）

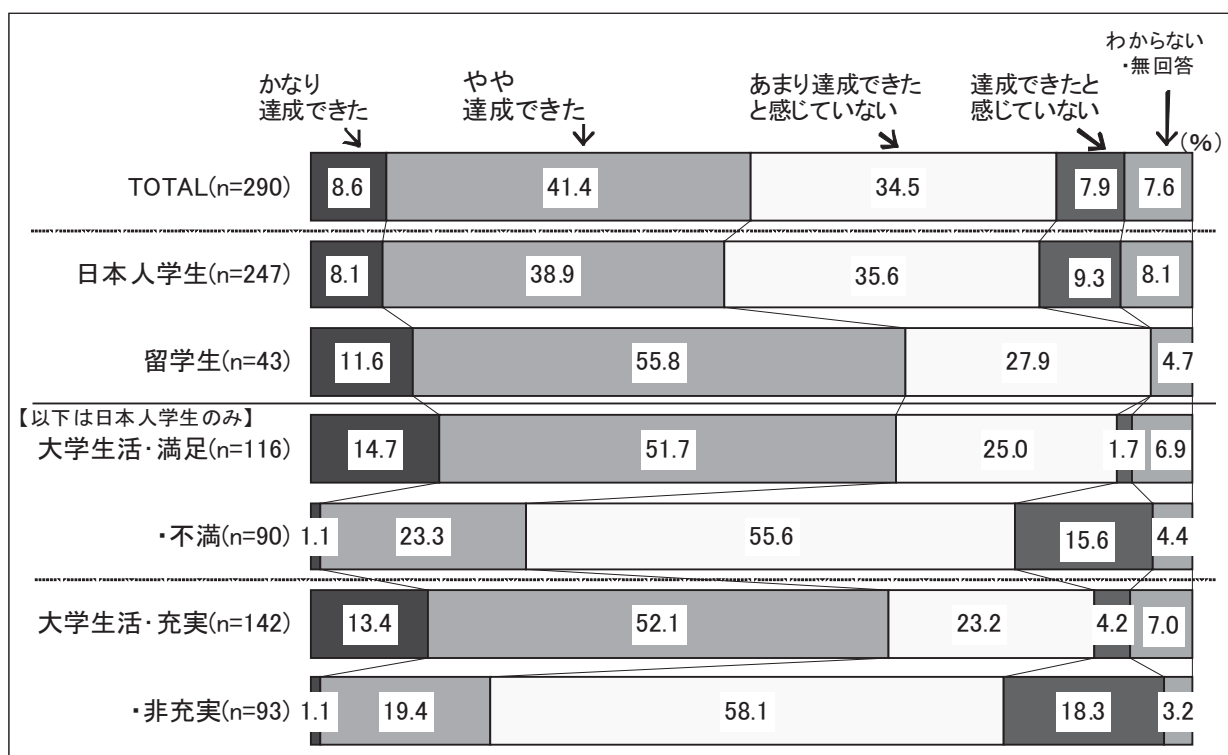


では、達成感を属性別にみるとどうか。図表7-10によれば、次の傾向を読み取れる。

- ・日本人学生より、留学生のほうが達成感のはるかに高い
- ・大学生活で満足感のある学生は、圧倒的に達成感も高い（66.4%）

・大学生生活で充実感のある学生は、圧倒的に達成感も高い（65.5%）
この傾向は、満足感、充実感のある学生は、達成感も圧倒的に高いことを示す。

図表 7-10 大学生生活の達成感（属性別）



（4）平成 19 年度の特徴－厳しい学生の評価－

以上を整理すると、次のようにまとめられる。

第 1 に、前年度と比べた平成 19 年度の傾向（全学年総合計ベース）は、＜満足感は 51.7% で低下、充実感は 61.1% でやや上昇、達成感 50.0% でほぼ横ばい＞（前回はそれぞれ 57.2%、58.4%、50.2%）という結果であった（図表 7-11）。充実感は 60% を越えかつ上昇したので好ましい傾向であるが、満足感と達成感 50% 程度とその水準は低くかつ低下気味であり、前進的な傾向が示されたとは言えない。

図表 7-11 満足感・充実感・達成感の前年比較

（全学年総合計ベース）

	A 今回	B 前回	A-B
満足感	51.7%	57.2%	△5.5%
充実感	61.1%	58.4%	2.7%
達成感	50.0%	50.2%	△0.2%

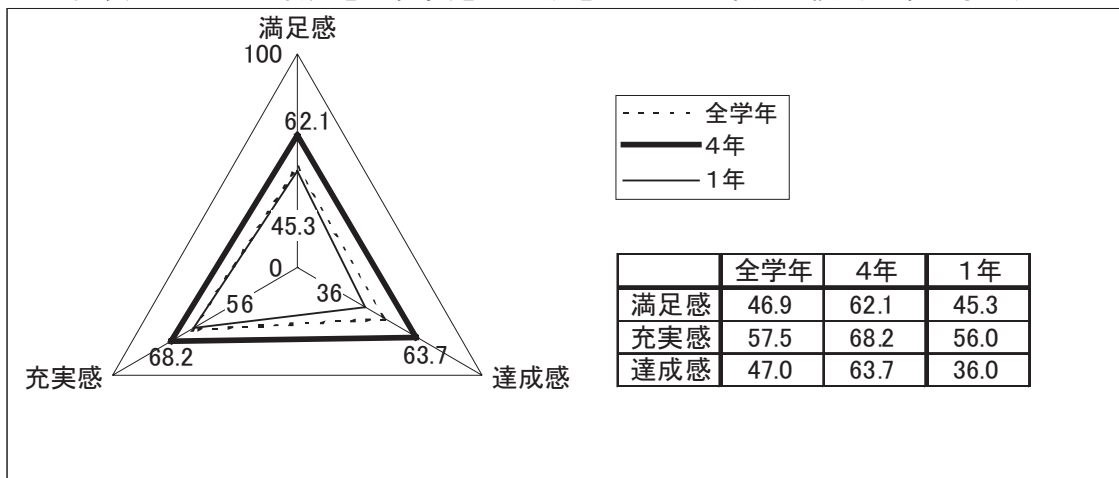
（注）今回＝平成 19 年度、前回＝平成 18 年度

第 2 に、日本人学生と留学生を比べると、満足感、充実感、達成感ともに、留学生の評価がはるかに高くなっている。これは好ましい傾向ではあるが、逆に見ると、日本人学生は厳しい評価をくだしているということを示している。

第 3 に、日本人学生の学年別評価をみると、満足感、充実感、達成感ともに、ほぼ学年進行にともない評価割合は上昇しているが、顕著な上昇は 4 年次になってから見られる。日本人学生の評価を 1 年次と 4 年次を比較してみると、図表 7-12 の通りである。満足感、充実感、達成感ともに、1 年次の時には低いが、4 年次には大きく高まることわかる。その意

味では、本学での教育、学生生活が有意義であることを示すと言えよう。しかし、評価割合はいずれも60%台にとどまり、まだまだ安心できる水準には達しておらず、教育のレベルアップが不可欠だと言わなければならない。

図表7-12 満足感・充実感・達成感の1・4年次比較（日本人学生）



4 充実感・達成感・満足感の要因別特徴

次に、満足感、充実感、達成感がどのような要因によって影響されるか、要因別特徴を整理する。

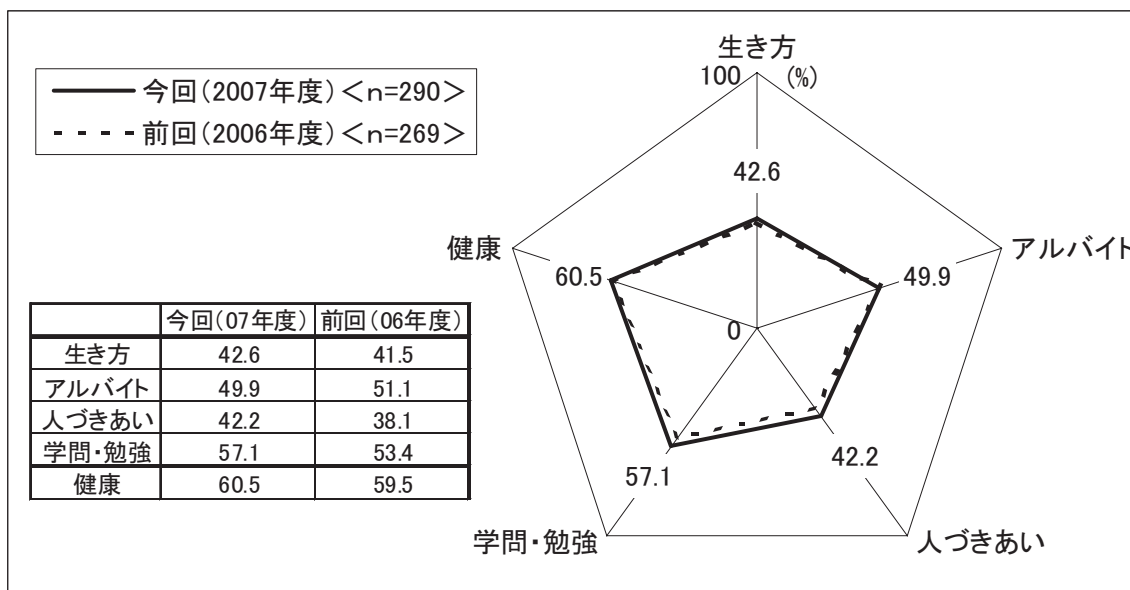
(1) 充実感の要因

図表7-1にのっとり、充実感の構成指標として相関の高い「生き方」、「アルバイト」、「人づきあい」、「学問・勉強」、「健康」の5つの結果を図示すると、図表7-13の通りである。

今回の結果は、「健康」が60%を越え最も高く、「学問・勉強」、「アルバイト」までが50%程度を越えるが、「生き方」と「人づきあい」は40%強でやや低くなっている。この傾向は前回とほぼ同様であるが、今回は「アルバイト」を除いて、すべての要因が上昇している。とくに、「人づきあい」と「学問・勉強」の割合は数ポイント上昇し、好ましい傾向を示す。

しかし、「生き方」と「人づきあい」は依然低く、充実感を高めるためには、目標を定めた生き方や人とのネットワークを広げて、自信をつけることが重要である。

図表7-13 充実感の要因別回答率



(注) 各指標の構成要因は次の通り。(巻末参考資料5参照)

『生き方』：“Q4a 人生・生活の目標を立てて過ごしている” “Q4b 規則的な生活を過ごしている” の「あてはまる」「ややあてはまる」の回答を合計し、質問数2で割った平均値。

『アルバイト』：“Q4c 社会に出てから役立つと思ひアルバイトをしている” “Q4d 授業の妨げにならない程度にアルバイトをしている” の「あてはまる」「ややあてはまる」の回答を合計し、質問数2で割った平均値。

『人づきあい』：“Q4e いろいろな学生と幅広くつきあっている” “Q4f 教職員とコミュニケーションをとっている” の「あてはまる」「ややあてはまる」の回答を合計し、質問数2で割った平均値。

『学問・勉強』：“Q4g 一般教養が身についてきている” “Q4h 専門的な知識が身についてきている” の「あてはまる」「ややあてはまる」の回答を合計し、質問数2で割った平均値。

『健康』：“Q4i 授業には必ず出席している” “Q10Be 朝食は必ず食べている” の「あてはまる」「ややあてはまる」の回答を合計し、質問数2で割った平均値。

(2) 達成感の要因

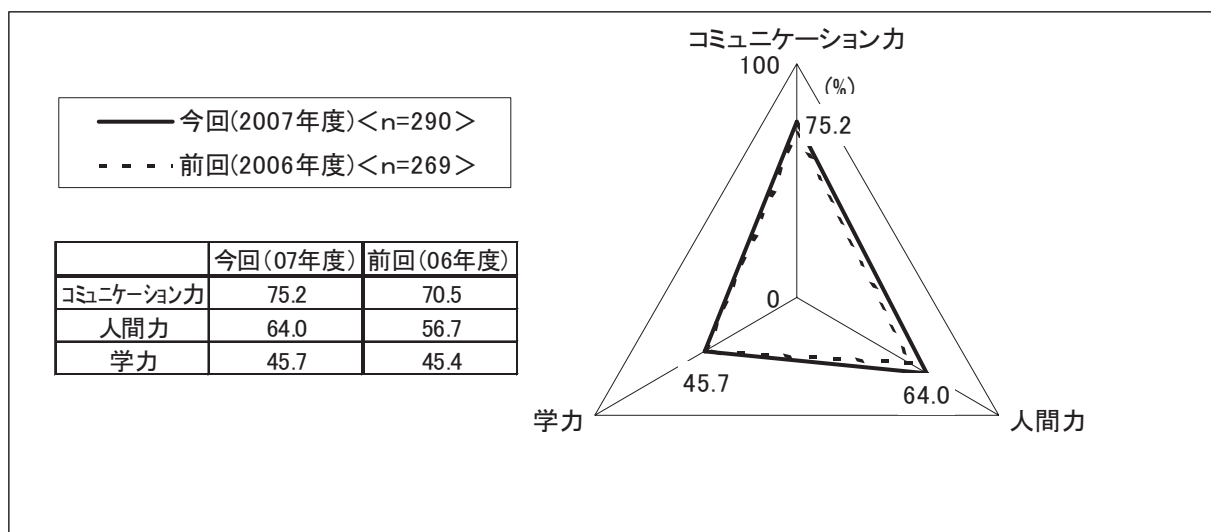
次に達成感の構成指標として相関の高い「コミュニケーション力」、「人間力」、「学力」の3つに括って、アンケート結果を図示すると、図表7-14の通りである。

今回は、「コミュニケーション力」が最も高く、「人間力」、「学力」の順であった。今回は、「学力」は45.7%の低位でほとんど変わらなかったが、「コミュニケーション力」は75.2%、「人間力」は64.0%と大きく上昇した。とくに、「人間力」は大幅に上昇した。大変好ましい傾向である。

よい友達ができたり、人と気軽に話ができるというコミュニケーション力、また人間的成長の自己評価は上昇しているが、学力については依然、自信がない状態にあると言えそうだ。

「学力」に自信を持つこと（文章力の強化、資格取得等）が進めば、達成感は確実に高まるとみられる。今後の大きな課題である。

図表7-14 達成感の要因別回答率



* (注) 各指標の構成要因は次の通り。(巻末参考資料5参照)

『コミュニケーション』：“Q6a よい友達ができたり” “Q6b 気軽に人と話せるようになった” の「あてはまる」「ややあてはまる」の回答を合計し、質問数2で割った平均値。

『人間力』：“Q6c 自分の適性や性格がみえてきた” “Q6e 物事をいろいろな角度から見るようになった” の「あてはまる」「ややあてはまる」の回答を合計し、質問数2で割った平均値。

『学力』：“Q6h 文章の読解力や書く力がついた” “Q6k 検定試験に合格した、資格を取得した” の「あてはまる」「ややあてはまる」の回答を合計し、質問数2で割った平均値。

(3) 満足感の要因

上記の満足度の構成要素（図表7-1）では、充実感と達成感の総合として満足感をとらえ、究極の満足感とは自ら望む進路選択の確定（就職、大学院進学）にあると考えた。したが

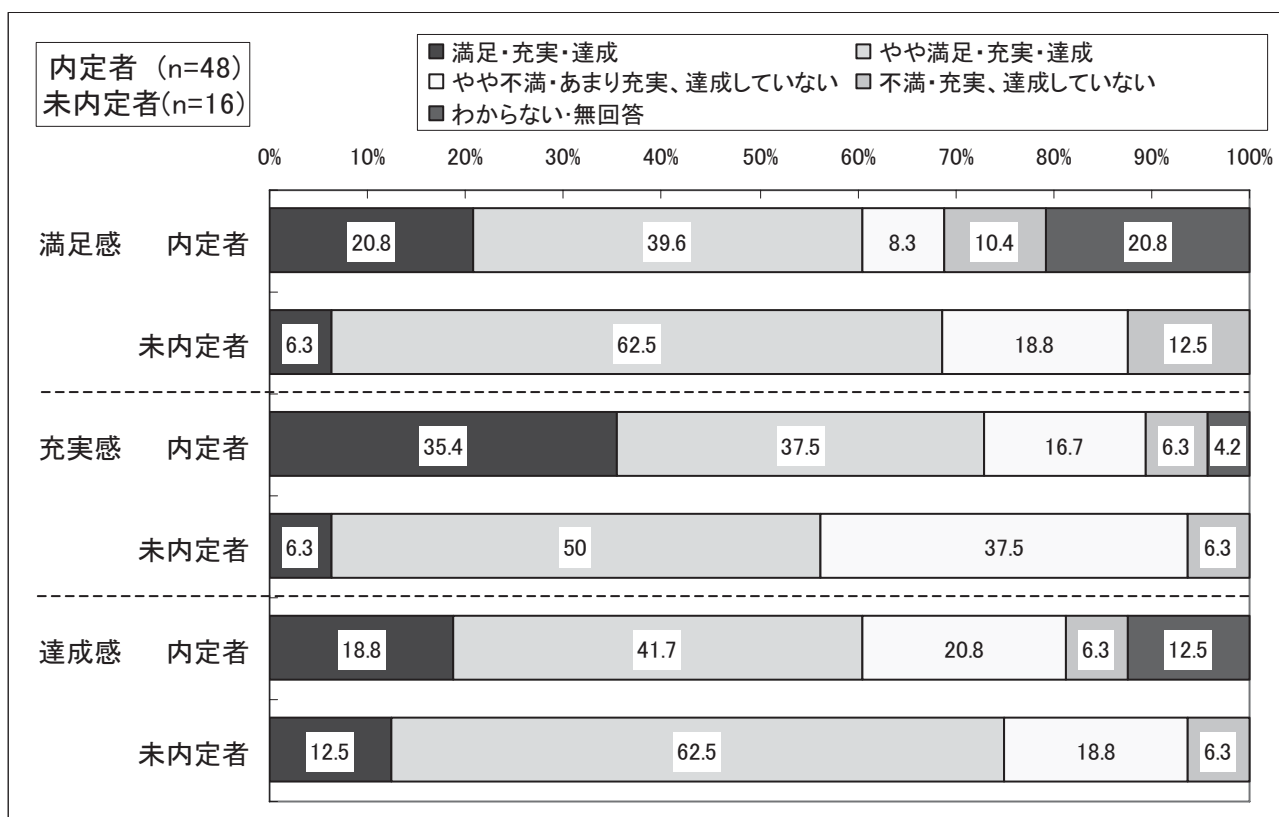
●就職内定者の満足度は高い

では、進路・就職との関連ではどうか。今回は、4年生に、調査時点（12月段階）で内定済みか未内定かを聞いた。

図表7-16によれば、4年生の12月時点での内定決定者の「満足」、「充実」、「達成」と評価している者はそれぞれ、20.8%、35.4%、18.8%に達し、未内定者のそれ（それぞれ6.3%、6.3%、12.5%）をはるかに上回る。就職の内定を得た者（48名）の満足度は非常に高いが、未内定者（16名）の満足度は非常に低くなっている。その意味で、就職等進路決定は満足度に大きな影響を及ぼすといえる。

ただし、図表7-16で、「満足・充実・達成」と「やや満足・充実・達成」の割合をプラスすると、未内定者の満足感と達成感の方が内定者のそれよりも大きくなる。だが、内定者（48名）の方が未内定者（16名）よりはるかに多いので、人数は全く逆になることに留意されたい。

図表7-16 満足感・充実感・達成感の4年生就職内定・未内定者別比較



5 社会人基礎力の現状と課題

今回の本調査から、社会人基礎力の有無に関する質問項目を新たに設けた。社会人基礎力の内容は図表7-17の通りである。社会人基礎力は学生が社会で活躍できる能力・資質として整理され、大学教育において社会人基礎力をいかに形成するかが大きな課題になっている。社会人基礎力の形成度合が学生の<就職力>を大きく左右するといえる。

図表 7-17 「社会人基礎力」の能力要素

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例) 「やろうじゃないかと」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れずに行動に移し、粘り強く取り組む。
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする。
	創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらうように的確に伝える。
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

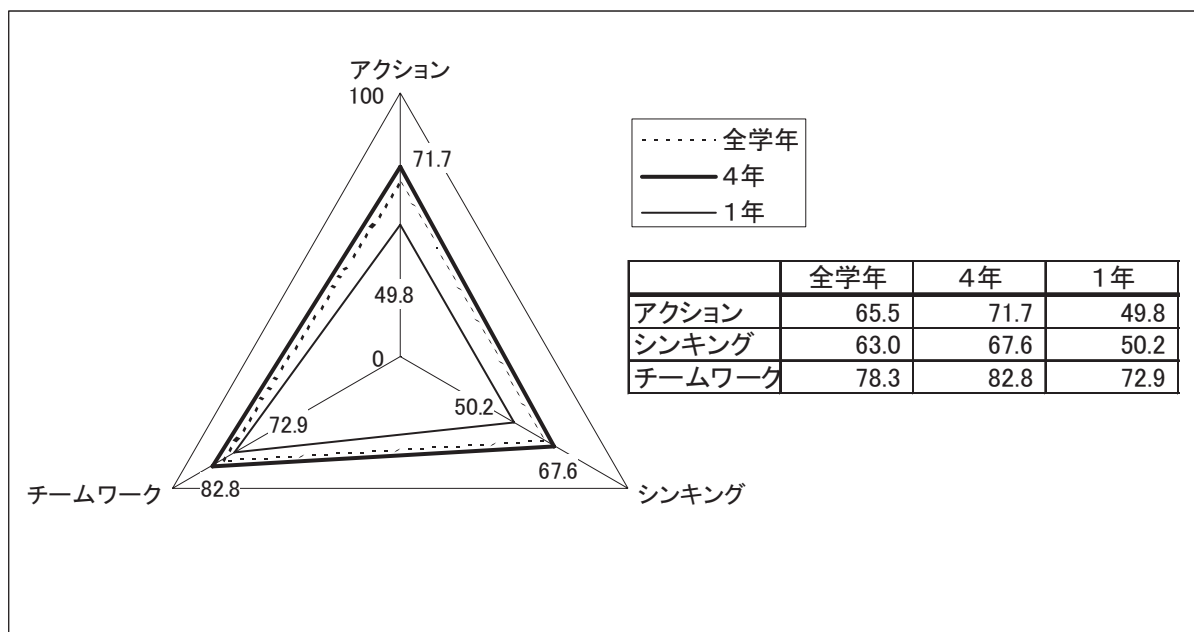
経済産業省「社会人基礎力に関する研究会－「中間取りまとめ」－」(平成18年1月20日)

(1) 社会人基礎力の現状

図表 7-18 は、学生自身が自己評価した社会人基礎力の保有割合(「ある」と「ややある」の合計の割合)を1年次、4年次、全学年合計を比較して、図示したものである。

まず目につくのは、1年次のアクションとシンキングの評価は低い(50%程度)が、4年次になると双方ともかなり高く(70%程度)なっていることだ。アクションの能力要素(主

図表 7-18 社会人基礎力保有率の1・4年次比較



体性、働きかけ力、実行力) とシンキングの能力要素(課題発見力、計画力、創造力) がすべて大きく上昇したからである。図表 7-19 によれば、これら能力要素はいずれも 15 ポイント以上上昇しており、とくに働きかけ力は 30 ポイント、創造力は 20 ポイントと大幅に上昇している。学年進行による教育効果が現れたと言えそうだ。

図表 7-19 社会人基礎力能力要素の1・4年次別比較

(単位: %)

		全学年	A 4年	B 1年	A-B
アクション	主体性	73.8	75.7	57.3	18.4
	働きかけ力	55.2	68.2	37.4	30.8
	実行力	67.6	71.2	54.6	16.6
	小計	65.5	71.7	49.8	21.9
シンキング	課題発見力	67.6	74.3	58.7	15.6
	計画力	61.8	65.1	49.3	15.8
	創造力	59.7	63.6	42.7	20.9
	小計	63.0	67.6	50.2	17.4
チームワーク	発信力	63.8	68.2	50.7	17.5
	傾聴力	75.8	84.9	69.3	15.6
	柔軟性	84.8	90.9	84	6.9
	状況把握力	86.2	87.8	82.7	5.1
	規律性	92	90.9	90.7	0.2
	ストレスコントロール力	66.9	74.2	60	14.2
	小計	78.3	82.8	72.9	9.9

第2に、チームワークはアクションやシンキングと比べ、1年次で高く評価され(70%強)、4年次にはさらに評価が高まっている(80%強)こと。チームワークの能力要素(発信力、

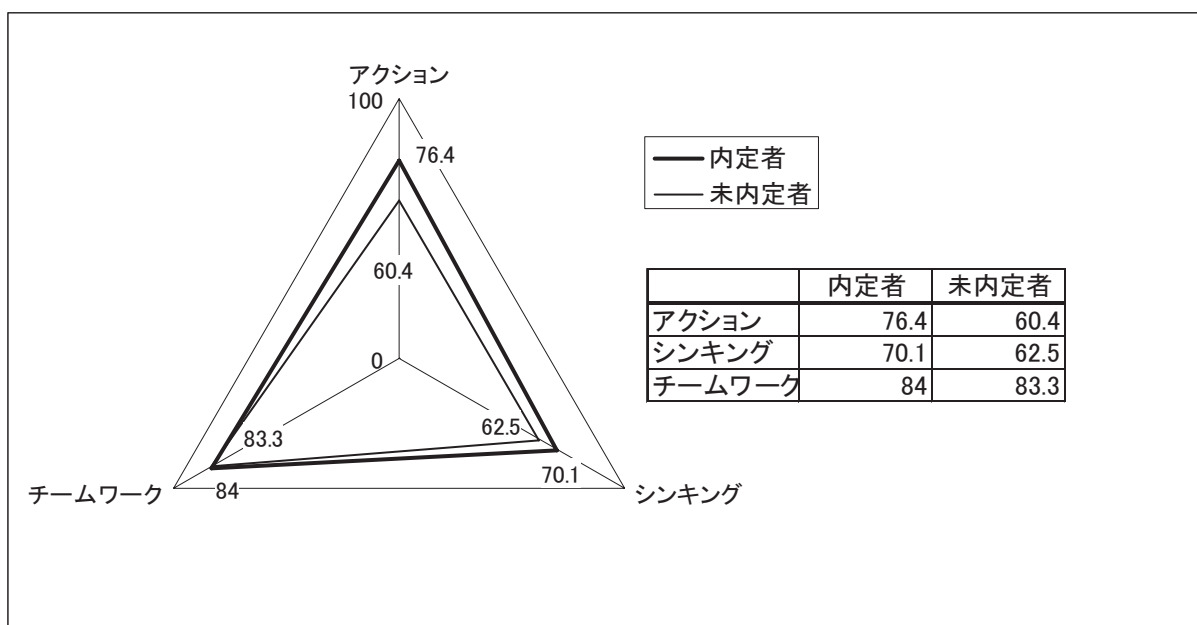
傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ストレスコントロール力)のうち、1年次では発信力とストレスコントロール力の2つが低い、他の能力要素は大きな差は出ていない。図表7-19によれば、発信力、傾聴力およびストレスコントロール力の3つは4年次の上昇率が高いが、全体としては1年次からの上昇率は10ポイント未満にとどまる。チームワークについては、学生はそれなりの自信があるようだ。

(2) 就職内定者は社会人基礎力が高い

では、4年次の就職内定者と未内定者で社会人基礎力の違いは見られるだろうか。図表7-20は、内定、未内定別に社会人基礎力の有無を図示したものである。

これによれば、チームワークは先の1・4年次比較と同様、内定・未内定者間の違いはほとんど見られない(83.3%、84.0%)。しかし、アクションとシンキングは内定者の方が未内定者に比べ、はるかに社会人基礎力の保有率は高くなっている。とくに、アクションは、60.4%(未内定者)に対し76.4%(内定者)と、16ポイントも内定者が高くなっている。

図表7-20 社会人基礎力の4年次就職内定・未内定者別比較



これを社会人基礎力の能力要素ごとに見ると、図表7-21の通りである。これによれば、アクションの主体性、働きかけ力、実行力全てで内定者が未内定者を10ポイント以上大きく上回り、とくに働きかけ力は大きな差(約25ポイント)が見られる。また、シンキングでも、課題発見力と創造力では10ポイント以上、内定者が未内定者を上回っている。

以上の結果は、就職の未内定者はアクションとシンキング、なかでもアクション力が弱いことが12月時点でも就職内定が得られない大きな要因になっていることを示唆しているといえよう。したがって、社会人基礎力の形成といっても、本学の場合は、アクション力とシンキング力、とくにアクション力(主体性、働きかけ力、実行力)の強化が大きな課題として浮かび上がる。

図表 7-2-1 社会人基礎力能力要素の4年次就職内定・未内定者別比較

(単位：%)

		A 内定	B 未内定	A-B
アクション	主体性	79.2	68.8	10.4
	働きかけ力	75.0	50.1	24.9
	実行力	75.0	62.6	12.4
	小計	76.4	60.4	16.0
シンキング	課題発見力	79.2	62.5	16.7
	計画力	64.6	68.8	△4.2
	創造力	66.7	56.3	10.4
	小計	70.1	62.5	7.6
チームワーク	発信力	68.8	68.8	0
	傾聴力	85.4	87.5	△2.1
	柔軟性	91.7	93.8	△2.1
	状況把握力	89.6	87.6	2.0
	規律性	91.7	93.8	△2.1
	ストレスコントロール力	77.1	68.8	8.3
	小計	84.0	83.3	0.7

(注) A 内定=48人 B 未内定=16人

6 若干のまとめ

最後に若干のまとめを行う。

まず第1に、平成19年度の学生満足度の評価は、＜満足感は51.7%で低下、充実感61.1%でやや上昇、達成感50.0%でほぼ横ばい＞という結果であり、非常に厳しいものであった。次年度は、充実感、達成感、満足感の上昇、グレードアップを図らなくてはならない。

第2に、そのためには、目標を定めた生き方や人とのネットワークづくり等による充実感、また学力（文章力や資格・検定等）の向上による達成感のアップをめざす必要がある。これが着実に進めば、4年次に満足感等の上昇が見える現状から、学年進行にともなう満足感のアップがはっきりと目に見える形でより明確にできると思われる。

第3に、4年次の早期就職内定決定を得るためには、社会人基礎力の充実・強化が不可欠であること。とくに、アクション力（主体性、働きかけ力、実行力）とシンキング力（課題発見力、計画力、創造力）をいかに身につけるかがカギである（就職力の形成）。前年度から進めている問題解決型PBL方式の授業等教育内容・方法の改善、体系化を急がなければならない。

最後に、次年度は本プログラムの最終年度なので、教育内容・方法の改善の検討をベースに、より明確かつ総合的な満足度指標の開発を行う必要がある。満足度アンケート調査項目と社会人基礎力、フューチャーマップ診断、授業評価アンケートの構成項目との関連性を明確にし、統合的な指標開発を行い、各種アンケート等を統合的に実施する。